

「原風景」

主任司祭 晴佐久 昌英

たとえ半年でも日本を離れて暮らすと、日本が文字どおりの母国、すなわち生まれ故郷なのだとつくづくと思い知らされる。

日本の色、日本の音、日本の匂い。日本に生まれるということは、否応なしに日本の色に染まるということであり、日本の匂いが染み付くということなのだろう。パリではルーブルやオルセーに通いつめて多くの油絵に感動したものの、帰国後、東山魁夷の展覧会で日本画を見たときの思いは、単なる「感動」よりもむしろ「安心」だった。それは見知らぬ山の絵でありいずことも知れぬ森の絵でありながら、まごうかたなき我が心の原風景だった。

先日、伊豆半島の天城山麓の山村、湯ヶ島を訪ねたのも、そんな原風景を求めてのことなのだと思う。ここは井上靖の自伝小説「しろばんば」の舞台で、中学一年のときにこの名作を読んで深い感慨を覚えて以来、いつしか自分の原風景ともなってしまうっており、いつかは訪れてみたいと思っていた「ふるさと」である。

井上靖は幼少期に親元を離れ、この湯ヶ島で祖母によって育てられた。祖母と靖少年のたった二人、土蔵での暮らしである。朝、土蔵の二階で目覚めた少年が呼ぶと、下で炊事をしている祖母が「どっこいしょ、どっこいしょ」と階段を上ってきて、「はい、おめざ」とひねり紙に包んだ飴玉を渡す。判で押したような日々。鉄格子の小さい窓の外にざくろの木があり、その葉っぱ越しに何枚かの田んぼが見え、その向こうに丘と森、遠くに小さい富士が見える。

少年にとってはこの土蔵が全てである。この小宇宙で自我に目覚めた井上靖は、やがて少しずつ他者を知り、世界と出会い、ついには大宇宙と向かい合うような壮大な歴史小説を書くことになるのだが、原点はこの土蔵にある。全てはこの土蔵から始まったのだ。

土蔵跡に今は石碑があり、そこからののどかな眺めは、まさに思い描いたとおりの原風景であった。誰にでも原風景がある。それがどれほど有難いことか。わたしという存在は、確かにこの世界の一点で生まれたのだ。人生の初めに目にした原風景。恩寵の風景と言うしかない。